

手記：「性犯罪被害にあうということ」を読んで

不特定者を対象とする犯罪が多い昨今、女子学生の多い授業を行っているだけに、彼女らが性犯罪にあわなければいいが…とつい案じている。

そうした折だけに、手記「性犯罪被害にあうということ」の新聞書評が目にとまり購読した。

著者は、仕事からの帰途に男2人に車内に引きずり込まれてレイプの性犯罪被害者の女性であった。

「その日から変わってしまった身体・考え方やものの見方、また、家族や恋人、友人等の人間関係…」の中での屈辱感と罪悪感の日々が、被害者にしか語れないリアリティーの数々で触れられていた。

最初に、「この手記が、ひとつの理解に繋がっていけたら嬉しいと思う。大切なのは、制度でも警察でも支援団体でもお金でも復讐でもない。近くにいる人の支えや理解なのだ。同情をかいたくないことだけは、先に伝えておきたい。」と記している。

被害にあった痛みは、「自分が感じることが事実なんだ。真実は、私の知覚の中にしかないのだ。絶対的な『真実』を追求するのではなく、それぞれの中にある『真実』を伝え合うことが、支援であり、私たちが一番求めている『理解』なのではないだろうか。」とも記している。

その理解の難しさは、例えば、被害にあったことを話した母親から「他の人に話さないように！」と云われるより、「“辛かったね” ってたった一度でも抱きしめてくれたらどんなに安心したか…」と振り返っている。

著者は、後年、形だけでも幸せと呼ばれたいと結婚するも、犯罪被害時のトラウマからか、夫とのセックスの後に決まって嘔吐することから離婚を申し出る。

かくも性犯罪被害者の心の傷は深く、持続するよう。

著者は、屈辱感と罪悪感の日々から自らの視野が開けたと感じられるようになったのは、ネットで他の性犯罪被害者と交流し、あるシンポで被害者の本当の苦しさを解って欲しいと実名で経験談を話してからのよう。

そうした経験からか、「理解を得るために、それぞれが伝え合わなくては。私たちは『理解したい』という気持ちを求めている。」と、手記を締め括っていた。

苦悩は人には話し辛いものであるが、やはり「見えないことは解らない」だけに、勇気を出して発信するということがそれらから抜け出す第一歩であり、また、それらを理解しようとするとはどういうことかを考えさせられる手記であった。